

ダイズ吸実性カメムシ類

○ 被害と発生生態

山口県のダイズに被害を与える吸実性カメムシ類は、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ、ブチヒゲカメムシである。これらの種はダイズの莢が肥大し始める8月下旬～9月上旬頃には場へ侵入して産卵し、9月上旬から若令幼虫がみられ始め、9月中旬から幼虫が増加し、9月下旬に発生ピーク（アオクサカメムシは10月上旬）となる。成虫、幼虫ともに莢が黄変し始める頃まで吸汁を続ける。越冬は、成虫で日当たりのよい場所の枯葉、落葉の間、常緑樹の茂った葉の間等で行う

吸実性カメムシ類は、莢に口針を刺して内部の子実を吸汁し、収量や品質に大きな被害を与える。特に子実肥大初～後期（9月上旬～下旬）に加害されると被害が最も大きい。被害が大きいといわれる「青立ち」となる。幼莢～莢伸長期（8月中下旬）の加害は落莢や板莢（不稔粒）となる。なお、8月中下旬は、山口県ではカメムシ類密度は低いため、被害が発生する可能性は低い。この時期に加害されると、莢は落下するが、サチユタカでは新たな花が開花するため補償作用により収穫期には回復する。ただし、干害等による落莢が多い条件等では、補償作用がうまく働かないことがあるので、注意が必要である。

○ 防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

- ・播種時期が遅いほどカメムシ類の被害が少ないため、播種は6月中旬～7月中旬に行う。また、極端な早播きは被害が大きくなるため避ける（品種；サチユタカ）。

（イ）薬剤防除

- ・6月播種の重要防除時期は、子実肥大期（開花期後45～50日頃、9月中旬）である。また、散布後にもカメムシが発生する場合は、追加防除（開花期後60日頃、9月下旬）を行う。
- ・干ばつ等で着莢数が減少する恐れがある場合やカメムシ類の初期の発生が多い場合は、ハスモンヨトウや紫斑病と合わせた防除を検討する。
- ・7月播種の場合の防除時期は、子実肥大初期（開花期後35～40日頃、9月中旬）である。
- ・無人ヘリやブームスプレーヤーで防除する場合は、莢に薬剤がかかりにくいいため、機能性展着剤を付加するか、浸透移行性が高い薬剤を選定して実施する。



ホソヘリカメムシ成虫



ホソヘリカメムシ幼虫



イチモンジカメムシ成虫



イチモンジカメムシ幼虫



ブチヒゲカメムシ成虫



ブチヒゲカメムシ幼虫



アオクサカメムシ成虫



アオクサカメムシ幼虫